

# 「新しい自分を見つけよう！きらりキャンプ in 阿蘇①」事業報告書

事業推進室長 安部 信吾

## 1 事業の概要

- (1) 趣 旨 自然体験を通して、熊本地震の影響や不登校（不登校傾向、別室登校などを含む）など心に悩みをもつ青少年に自然体験の楽しさや達成感を感じさせ、自己肯定感を育む。また、交流の家での生活を通して、規則正しい生活のよさや友達と交流する喜びを感じさせ、基本的な生活習慣づくりのきっかけとなるようにする。
- (2) 期 日 平成30年6月17日（日） 【日帰り】
- (3) 活動場所 国立阿蘇青少年交流の家
- (4) 参加者 6名（小学生3名・幼児1名・保護者2名）
- (5) 担当職員 安部 信吾（事業推進室長） 花田 誠（企画指導専門職）  
前田 夢依（事業推進係員） 古閑 仁美（事業支援室事務補佐員）  
法人ボランティア1名
- (6) 内 容 レクリエーション 野外でお菓子作り（石窯チーズケーキ・アイスクリーム）

## 2 成果と課題

- (1) 成 果
  - 「もう一回参加したい」（参加者）、「全部楽しかったです。薪のオーブンでケーキを焼く体験だけでなく、大人数でのバランス遊びも驚きとともに楽しめました」（保護者）などの感想があった。自分たちでおやつを作ったり、作ったおやつを自然の中でみんなと食べたりする活動や、参加者とスタッフが一緒に活動をするレクリエーションを行い、参加者が楽しみながら活動でき、高い満足度を得ることができた。（満足度100%）
  - 来所時に事業への参加を渋っていた参加者が、野外での活動を通して、他の参加者やスタッフとかかわる中で少しずつ心を開いていき、生き生きとした表情で活動することができた。子供の変容を見て保護者の方も満足されていた。
  - レクリエーションにおいて、ボランティアによる進行の場面を設定したことで、参加者とボランティアの距離が縮まり、参加者も楽しそうな表情で活動をしていた。
  - 参加者の保護者同士も交流ができ、子育てについての情報交換もできたようであった。
- (2) 課 題
  - 参加者が来所の際は事業への参加を渋っていたが、プログラムを変更して野外活動から行うようにすることで、少しずつ心を開いて活動に入っていくことができた。心に悩みをもつ子供にとっては開会式や知らない人の中に入っていくことへは抵抗があると思われるので、今後も参加者に応じてプログラムを変更するなど臨機応変に対応していく必要がある。
  - 参加者が募集人員に達しなかった。第2回に向けて募集地域を拡大し、教育委員会や校長会などで今回の成果を報告するとともに、該当者へのチラシ配付の依頼を再度行う必要がある。
  - 参加者のニーズに合ったプログラム編成ができるように、参加者の学校での様子や配慮事項などについて事前に保護者に確認し、担当職員やボランティアで情報を共有する必要がある。